

文化庁月報



1985-8

No.203

【表紙】

重要文化財
ガラス小玉
国(文化庁保管)
解説は30ページ
題デザイン・桑山弥三郎
カット・林美紀子

もくじ

外からみた伝統芸能

河竹登志夫 4

△随 想

伝統芸能のあり方

戸板康二 8

伝統芸能について

宮本又次 10

地域文化活動紹介シリーズ②⑦鳥取県淀江町 13

町並紹介シリーズ⑤一京の町並一 16

△報 告

三浦文化庁長官訪欧

18

民俗芸能の伝統を青少年に

20

文化庁企画・提供

「美をもとめて」9月放送予定

22

昭和59年度文化庁日誌

24

——ルポルタージュ——

「今日出海さんを偲ぶ会」に出席して——

△展 覧 会

昭和60年度京都国立近代美術館特別展

現代デザインの展望

——ポストモダンの地平から——

京都市美術館、東京国立近代美術館 27

文化庁ニュース

昭和60年度国語問題研究協議会の開催

——静岡県と奈良県にて開催——

28

中国少数民族歌舞団来庁

——各人自慢の歌や踊りを披露——

28

昭和60年度文化庁発掘調査研究職員の試験

(国家公務員採用1種試験相当)行う

29

文化庁行事報告及び行事予定

30

国立劇場ニュース 9月舞踊公演

31

伝統芸能のあり方



戸板 康二
(演劇評論家)

日本の伝統芸が広い観客あるいは聴衆を持つようになったのは、そんなに古いことではあるまい。

歌舞伎は大衆の支持を得て来た演劇だから、徳川時代から町家の富裕な旦那から、長屋の職人までが親しんで見たわけだが、結果は原則として、貴族階級を対象にしていたので、私の少年時代に親につれて行つた観世の舞台の見所にいたのは、華族、大実業家といった人たち、そして演者に謡曲を習っている弟子が大部分だった。演奏の時、多くの人は小型の謡本をあげて、読みながら聴いていた。そしておどろくべきことは、狂言がはじまると、多くの人たちが、廊下に出て喫煙したりしていた。

こういうふしぎなことがなくなり、狂言はみんなの楽しむ芸になり、狂言だけの会が、さかんに催される。

文楽でも寄席の芸でも、それをせつせと見にゆくのは特別なファンで、まったく無関心

に十八番がいろいろ演じられたが、その初演者はさまざまな團十郎で、芸風にもちがいがあつた。それを反映した舞台ができたのである。「勧進帳」をこしらえた七代目は、いさゝか芸を整理して後代に伝えようとする大事業を、みごとに成功させた一方、古典を新しい演出で見せたり、新しい脚本で、いろいろな役柄を開拓した。その子で明治を代表する名優の九代目は、「活歴」とよばれる史劇を得意とし、実物のようなりアリテイで、家康や清正や大石内蔵助を演じたのだ。

こんどの三か月の間に、十八番を演じるのは襲名した以上、当然課せられる至上命令だが、じつは十一代目の初演した「若き日の信長」が、親ゆずりの役で、十二代目としては、いちばん楽しそうに、好演を見せていたのだ。これを見ても、十二代目は、よき作家のよき作品を求め、自分なりの新しい歌舞伎を創造しようとするべきだろう。大正から昭和にかけて三十年間二代目左団次が、岡本綺堂、岡鬼太郎、真山青果のために、じつに多くの名演技を示したことを、現代の俳優として、松竹の興行者は、ぜひ確認してもらいたい。

その時代その時代の観客は、つねに性格や好みがちがつていた。そういうファンを満足させるには、新歌舞伎の代表作はむろん演じる以外に現代人が喜び、しかも歌舞伎独特の手法を活用した新しい脚本の生まれるのを、切に望むのである。劇作家も大劇場の女優主

な者が生涯、それらの楽しみを知らずにおおつてしまふといったことも、そんなに遠い昔の話ではなかったようだ。

落語のブームは、戦後に勃興したまま、ずっと続き、各大学にオチ研(落語研究会)ができ、まだ若い作家が司会をしたり、役者になったりもして、若い女性の人気者になつてゐる。

これは、ラジオ、そしてテレビによる普及である。文楽にしても、実際の公演に劇場までゆく人数は多くないとはいへ、電波を通じて義太夫を聴いたり、人形を見たりしない者はいないだろう。

一方では、伝統芸の能楽、歌舞伎、邦楽邦舞の一流は、人間国宝と俗称される無形文化財に推挙され、芸術祭、芸術院、文部大臣からえらばれて受賞もし、芸術院賞あるいは文化功労者になる人さえ出てきた。

演劇やテレビドラマばかりでなく、歌舞伎にも、関心をもつてほしい。いろいろな経済的な事情がからむのはわかっているが、できない相談ではない。

猿之助のように、積極的に自分で古典の復活とファンへのサービスを絶えず考え、外国にまで単身の一で出張する姿勢も、高く評価できるが、祖父猿翁以来のこうした「新人」にくらべて、日向ぼっこをしているようなのんきな役者もいる。老年期の大幹部も、その親たちにくらべると、出演の数を少なくしたがつていえるように見えるのである。

この六月の末に、四国琴平に復元され、文化財として指定されている金丸座が、文化庁の格別の配慮で、実際に歌舞伎を上演して見せてくれたのは、近來の快挙だった。

平土間や棧敷にすわって見るのは、椅子に馴れた者には、いさゝか苦痛といえないこともなかったが、建造物が本来の目的、正しい意味をもつて、たった三日でも蘇生し、脈を打ち、呼吸したわけだ。

それにうれしいのは、吉右衛門が、この「小屋」にふさわしい桜姫清玄の台本をアレンジしたことで、猿之助と同じような、軒昂たる意気に拍手を送りたいと思つた。

大山の明治村にも、呉服座という昔の劇場が移築されているが、これはあくまで保存さ

国立劇場、国立能楽堂、国立文楽劇場が建つたことともに、戦前にくらべて、たしかに国家から認められる存在になった古典芸が蒙っている待遇は、その道の人々には、うれしいにちがいない。

しかし、考えなければならぬのは、ひと口に古典というが、いま博物館のガラス棚に守られている美術品と同じように、原形を大切に保存するだけでは、結局、それらの芸が完全に生きているとはいえないという問題がある。

私の知っている名人でも、能の桜岡弓川、文楽の山城少樫、歌舞伎の六代目菊五郎という人々は、先人に教わった古典を、自分なりに咀嚼し消化して、べつの芸のように仕上げていたのだ。

そういう名人に対して、決して新しいことをしない頑固な名人もいたのである。この二つが車の両輪のように、芸の世界をゆたかにしていたのだ。

落語にしても、八方破れの志ん生に対し、演目の時間が三十秒も狂わないといわれた桂文楽がいて、この二人が同じ日の落語会に揃つて出演した時など、わくわくしたものであつた。

この春、盛大な披露興行を催し、十二代目團十郎という名前ができた。三か月のあいだ

れているだけの、いわば複製である。

劇場が生きた姿で見られたのは、じつに珍らしく、たのしいことであつた。しかも、この催しは町を挙げての大イベントとなり、町の若い女性が、奉仕的に赤い前垂れをかけた「お茶子」として、観客接待をしたのである。つまり、琴平という門前町の祭典になつたので、そういうあり方で祇園祭と同じように、すべての人々が熱心に協力している。

もっとも、いま全国の祭礼、年中行事、郷土芸能は、テレビや文化映画、その他の情報媒体を通じ周知され、しかもそれは観光客誘致のために、平均的日本人の好むような形式になりつつある。神の降臨である以上、日を変更できないはずの祭礼が日曜日というこゝとになったり、素朴な芸能の衣装がカラーテレビのうつりのいように改められたり、そういう異変も時世としてやむを得ないかも知れないが、そんなことはどうでもいいといつてはならないものだだけは、基本的に、知っていてもらいたい。

一般の伝統芸においても、これらと似たような疑問が存在するが、すべて深く考え、真摯についての見分ければ、忘れてはなるまい。

戸板 康二(といた やすじ) 1924年12月14日 東京生まれ。慶応義塾大学国文学部、日本演劇協会常任理事。昭和28年、文部大臣賞。同34年、「四十郎切腹事件」にて東大賞受賞。同51年、菊池寛賞。同52年、芸術院賞受賞。著書に「ちよつといひ話」(文芸春秋)、「歌舞伎論議」(小学館)等がある。

編集後記

○厳しかった今年の夏もようやく終わろうとしています。皆様はいかがが経過でしょうか。

○今月は、我が国の伝統芸能について、外国からどのようにみられているか、また、その保存継承についてどのように考えるべきかという異なる二つの視点から、河竹、戸板、宮本三先生の玉稿を頂きました。

河竹先生が書いておられるように、最近の外国における日本文化、とりわけ伝統芸能に対する「知識・理解度の深まり」と知的欲求の大きさは顕著なものがありますが、その際心せねばならないことは、戸板先生の論考にありますように、「伝統芸一般について深く考え、真摯にしているの見分けだけは、忘れてはなるまい」ことではないかと思われまふ。
(S)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課
TEL(03)三六八二二四(代表)

「文化庁月報」八月号

(通巻第二〇三号)
昭和60年8月25日印刷・発行

編集文化庁

〒100 東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
発行所 株式会社 きょうせい

本社 千代田区中央区銀座7丁目4番12号
営業所 千代田区新橋区西五軒町52番地
電話(03)三六八二二四(代表)

振替口座 東京 九一六一番
印刷所 ㈱行政学会印刷所

定価 一八〇円(送料四五円)
年間購読料 二、一六〇円(送料共)